

少子高齢化社会

「少子高齢化」社会が言われるようになって久しい。平均寿命は延びる一方で、年々出生率の低下により生まれてくる子どもの数が減り、国の成長を支える人口動態もいびつな形になり、経済の先行きに黄信号が灯っている。

国の統計では65歳以上の人を高齢者と定義しているが、国連では高齢者は60歳からとみている。これも日本人の長寿を示唆しているひとつの表れと言えるだろう。

過日法隆寺長老の高田良信師が「老衰」で亡くなられた。今や男の平均寿命が80歳を超えている時代に、「老衰」とはさぞかなりのご高齢かと思いきや、失礼ながらまだ76歳になったばかりの新米「後期高齢者」だった。いまだきこの御年で「老衰」とは少々違和感がある。まるで童謡の♪十五で姐やは嫁に行き～♪や、♪村の渡しの船頭さんは今年六十のおじいさん～♪のように、この高齢化時代を未だに昔の老けこんだイメージで考えられているのではないだろうか。

古来長寿には区切りの好い年齢ごとに慶祝の言葉があり、かつてミスター巨人軍の長嶋茂雄さんが「初めての還暦を迎えた」と言って笑いを誘った60歳還暦に始まり、古希、喜寿、傘寿、米寿・・・111歳の皇寿までその数は10種に及ぶ。ひょっとすると長嶋さんの長寿への期待を膨らませた「2度目の還暦」？まで祝うようになるのではないだろうか。

「後期高齢者」入りしてから、空元気を出して「後期高齢者」を返上し「光輝高齢者」だと周囲に吹聴していた。慶応病院人間ドック検診の折、応援歌「若き血」に便乗して♪～『光輝』充てるわれら～♪の「光輝高齢者」だと自己PRして、医師から「その言葉は元気が出ます。いただきますよ」と言われた。その後「香気」冴えて「高貴高齢者」にまで上り詰めた。せいぜい「好奇高齢者」に見られぬよう自戒しつつ、「高貴高齢者」仲間ともども残り少ない「光輝」溢れる余生を、「高貴」に楽しむ「好機」にしたいと願っている。